

『心理学概論』における心理学の 扱いの変遷に関する一考察

菱 田 一 仁

要 旨

心理学が明治時代に日本でも大学で学ばれるようになってから、時代の変化に応じてどのように教え方が変化してきているのかについて検討を行った。その中で、本稿では心理学を初学者に教えるためのテキストである「心理学概論」のテキストの中でいかに心理学が扱われてきたのかについて時代を追ってその変化を明らかにした。

哲学から分離、独立して一つの独立した学問分野として成立した心理学は、当初実証科学的な側面の重要性が強調されながらも、カント哲学の影響を明らかにするなど、思弁的、哲学的な内容に関する関心を完全には否定するわけではなかった。しかし、時代を経る中で、構成主義だけではなく、行動主義、ゲシュタルト心理学、認知心理学などの様々な立場が心理学の分野の中に成立してゆき、その人間観などではなく、「行動からの心理学」という言葉で表現されるように、思考などを含んだ広義の「行動」を対象とした実証的な研究を行う学問という観点で捉えられることが多くなっていったことが検討された。その中では、それぞれの立場が背景としている人間観などに違いがあるものの、心理学概論を教える際にはそうした差異については言及されるのではなく、実証的な方法論などの共通点を持って説明されることが多くなっていると考えられた。その中で、多様な領域を含む心理学を一つの学問分野として捉えることを可能にする半面、その背景としてどのような人間の捉え方があるのかという視点が弱くなってきていると考えられた。

心理学が多様な領域を含み、同じ「心」という対象を扱いながらも、それをいかに扱うのか、捉えるのかについては差異があると考えられ、そうした差異についても意識的に扱うために、心理学の背景にある人間観や哲学について意識的であることが有用なのではないかと考えられた。

問題 心理学はいかに教えられてきているのか

1879年にライプチヒ大学にヴントの開いた心理学の研究室が加わって、哲学など他の分野から独立した学問分野としての心理学が誕生してからおよそ150年の時が経ち、心理学は大きく発展してきている(サトウ, 2003a)。その中で、一言で心理学と言っても、認知心理学, 社会心理学, 教育心理学, 発達心理学, 臨床心理学などその内容は多岐にわたっている。視覚や聴覚といった認知, 対人関係や社会の中での個人のあり方, 幼少期からの発達や社会的な成熟, カウンセリングや精神分析といった心理療法など, 同じ心を対象とした学問とは言っても, 多様な領域を含んでおり, その全体像を捉えることすらも難しいほどである。一方で, 心理学は多くの大学などで専門科目として教えられており, その全体像を教える科目として心理学概論の授業が設けられている。では, 心理学はいかに教えることが出来るのだろうか。あるいはどのように教えることが適切だと考えられるのだろうか。高砂(2003)は, 本邦における心理学の歴史に関する研究が少ないことを指摘し, 歴史を学ぶことがその対象の本質を知ること, あるいは将来を展望するために重要な役割を担うと述べている。本稿においては, 心理学の全体がどのように捉えられ, 教えてこられたのかについて歴史を追って検証することによって, これまでに本邦において心理学がどのように捉えられてきたのかについて検討する。そのために, これまでに心理学の全体像について教えるのに使われてきたテキストを, 年代を追いながら概観して, これまでの心理学教育にどのような傾向がみられたのかを明らかにし, そこから見出される課題を検討する。

その際, 本稿においては心理学概論のテキストにおいて心理学がどのように扱われてきたのかに焦点を置きながら検討を行う。心理学概論のテキストは心理学全体を包括するように書かれている他, 心理学を主に初学者に対して教えることを前提として書かれているという点が共通しており,

戦前から近年に至るまで同じ様に書かれているためである。

戦 前

1888年にアメリカで博士号を取得した元良勇次郎が帝国大学で初めての精神物理学の教授に就任し、1903年に東京帝国大学で精神物理学実験室が作られるなど、日本における心理学の礎が築かれる。1912年には雑誌『心理研究』が発刊された他、1913年には京都帝国大学、1920年代には東北帝国大学の他、九州帝国大学、朝鮮半島の京城帝国大学にそれぞれ心理学講座が開設されるなど、発展していく。しかし、第二次世界大戦に突入していく中で、事実上心理学者の自発的な研究を行うことが難しくなってくるサトウ(2002; 2003b)。

日本におけるヘーゲル哲学の先駆者として知られる紀平(出版年不明1901?)の哲学館(現在の東洋大学)における講義録が、『心理学概論』としてまとめられている。その中では、「運動或は力の如きまた物理学の研究範囲なりと雖も心的現象の研究よりして見れば運動も力も因果法等しく自己を中心として他界に應用したるものなりとの論も立ち来りて勢ひ心理学の研究範囲に入り来るその他生理学との関係も甚だ密接にして前に云へる物質論に傾く学者は心理学を以て生理学の範囲内へ全く入る、学者もあるなり是に依りて『フェヒ子ル』(Fechner)によりて創設せられたる精神物理学(Psycho-physics)は愈其勢力を増大するに至り精神の何物たるかを説明するに力を持ちゆる哲学的心理学は漸次其勢力を失ひつゝあるの感あり」と、心理学が観察可能な対象に対する研究を進める中で哲学から分離しつつあることを述べている。そして、「哲学の立脚地如何は精神現象を科学として研究する心理学全般に及ぼす影響実に大なるものあり然れども哲学と心理学は又同一視すべきものにあらず」と、哲学と心理学の区別を強調する。一方で、「精神活動の起源法則を知り知識の性質及範囲などを知れば茲に哲学の基礎も確固たる地盤の上に立つに至り其哲学は始めて完全なりと云

ふべきなり『カント』が独断的哲学(Dogmatism)を棄て、批判的の哲学(Criticism)を立てたるは実にこの点にあり『カント』の功績大なりと云ふべきなり」と、心理学と哲学が互いに支え合うような関係を示している。ここでは、心理学が哲学から独立していることは強調されているものの、その成立の背景として単なる思弁的な哲学を超えたカントの哲学が重要な役割を果たすと述べている点特徴的であると考えられる。

紀平に先立って、元良はヴントの『心理学概論』を翻訳する(『ヴント氏心理学概論』(元良, 1899))など、日本の心理学の発展に努めた。そして、元良に学び、日本で初めての心理学専門書とされる『実験心理学』(大槻, 1911)を刊行した大槻(1912)は、『心理学概論』において、心理学を「心の科学」と述べ、「普通に心と云へば、吾人の内部に存在して、思考し、想像し、情を起し、意志を定め、行動に及ばさしむる等の、種々の働きをなす能力を有してゐる無形の本体と考へ、物質と異なる一種の実体と思惟している。かゝる考へにて、心理学は心の科学なりと云はゞ、大なる誤謬と云わねばならぬ」と、心理学という言葉において使われる語が、一般に使われる意味とは異なっていることを示している。そして、「蓋し心とはさきに云へる思考、想像、感情、意志等の諸作用全体に対して、便宜上命名したに過ぎぬので、凡ての思考、想像云々と用ふ代わりに、簡単に心と称するのである」と、心が操作的に定義された言葉であるとして、その研究対象や方法について限定して述べている。また、「嘗て斯学を哲学の一と考へ、科学にあらずとした時期も、昔の或時代にはありしも、現今にては心理学を哲学と考へてゐる学者は居ない」、「心理学を哲学と考へていた時代は哲学に使用する方法に由り、重に思索に耽つたものである。然るに心理学が独立して科学となるや、所謂科学的研究法は悉く採用せらるゝに至つた」として、思索を中心とした哲学と心理学との区別を強調している。

一方で、元良(1915)は、心理学について「心理学は内観によりて生活々動及び生物体各部の調整法を研究するの学なり」と定義している。上に述べたように、元良(1915)は、ヴントの心理学に学んだことから、ヴントの

内観を用いた構成主義的な心理学の立場を明らかにしていると言えるだろう。元良(1915)はこうした定義をすることに関して、「哲学的傾向を有する学者は、心理学を以て内部観察に表れたる現象を研究する学なりとす。之に反していわゆる経験的心理学者は、生理を離れたる純粹なる内観的研究を以て、研究の結果左まで有益ならずとし、内観的現象は必ず生理活動と連関せしめざるべからずとす。斯の如くにして構成せられたるものを、生理的心理学と謂ふ」と、経験主義的な観点があることを説明しており、自身の拠って立つ立場とは異なった視点があることを同時に認めている。

しかし、元良(1915)は、「然るに生理的心理学の難点は、其の論理的基礎を定むるの困難になるにあり。何となれば、一方は空間的にして他方は、非空間的なるが故に、両者に共通なる基礎的概念を求むること困難なればなり。またマクドゥガル教授は、『心理学とは、生物の行為の経験的的科学なり』と主張す。此の行為なる語は、最広義に用ひられたるものにして、活動、若しくは順応なる語と同意義なりと見て差支えなしと雖も、この定義は非空間なる嫌ひあるが故に、本書はこれを採らず」と、生理学的心理学の立場はとらないという自らの立場を明らかにしている。そして元良(1915)は、心理学に関して物理学と比較しながら、「内界、外界を通じて、吾人が研究の対象たるものは、エネルギーの諸変形に外ならずと雖も、自然科学者は、其の時間及び空間上に運動となりて現れたるものを研究し、心理学者は、其が観念及び感情となりて現れたるものを研究するなり」とそれを説明する。つまり、物理学などの自然科学において研究の対象となっているのが、目に見える、空間的に存在するものであるのに対して、心理学の対象となる観念や感情はそうではないという。ただ、心理学が扱う領域については、「表象の如きは、心界の事実にして、同時に外界を現はすものなれば、外界と内界との別は、しかく判然たるものにあらざる」と述べており、内界と外界の連絡、つまり非空間的なものと空間的なものとを両方扱うものとして捉えていたと考えられる。

これは、元良(1915)において「大宇宙と小宇宙との関係」という章の中

で、「西洋語に Microcosmos 及び Macrocosmos と云ふ語あり。前者は小宇宙を意味し、後者は大宇宙を意味す。而して哲学者は吾人の心を以て小宇宙となし、小宇宙を以て大宇宙の模型なりとなす」と述べていることにも表れていると考えられる。元良(1915)は、大宇宙と小宇宙の関連について、「観念論者中には吾人の観念が宇宙に充滿する如くに論じ、宇宙は畢竟観念中の存在なりとし、即ち心外に物なしとするものなきにあらず。然れども心理学の観るところはこれと異なり、心は畢竟身体内部に存するものにして、身体の有機的活動によりて活動するもの、而して其の身体内部に活動しつゝある心は大宇宙を知覚し、またこれを想像するを得るものとなす。然るに吾人は實際自己の想像が、宇宙全体に広がり居るかの如き感覚を有することなきにあらず」と述べている。ここで述べられていることは、ある種の神秘主義的な体験ともとることが出来るが、「読者もし自己の内観に訴へて観察すとせんか、表象が単に表象として存する以外に、なお表象の根本たる実世界のあることの想像が浮かび来ることを容易に発見すべし。然りと雖も、その実世界と思ふものがなお心の内部の想像に他ならざるべきことも、亦明らかなることなり」と述べていることから、ヴントが影響を受けたカントの言う形而上学的な世界と、それを捉える理性の働きによって写像されたものとしての心的現象という世界観を踏襲していると考えることが適切だと言えよう。つまり、元良(1915)の記述が、哲学的な考えをその基礎としていたことが分かる。

実際、元良(1915)においては「カントの謂はゆる致知覚」や「ヴント・ジェームス両教授の自我説明の比較及び批評」など、哲学的な観点に関して多くの項が割かれている他、「内省的心理学」、「ミュンステルベルヒ教授の自我の観念」、「内省法が他の半面を逸する所以」などに並んで、「仏教の第六識」について検討されているように、あらゆる心的現象について説明を試みようという意欲的な態度がみられ、それらについての説明を行っている。つまり、元良(1915)において特徴的なことは、哲学的な視点によって心理学の全体を説明しようという態度があった点だと考えられるだ

ろう。

ただ、少し時代の下った増田(1934)は、「見る、聞く、喜ぶ、悲しむ、判断する、読む、話すと云ふ様な吾々の現実に経験する所の現象」ではなく、その背景にある心や霊を想定し、その推定を中心とするかつての心理学を形而上学的心理学、あるいは思弁的心理学と述べ、「かう云う風な、事実に堅実な根拠を置かないで憶測を逞しくする形而上学的、思弁的心理学は今日の心理学会から廃棄せられて居る。勿論今日でも心、霊、魂と云はれるものが何を意味するかを考察しないではない。然し、それは吾々の現実に経験する心的現象について充分考究して後の話であつて、その考究を審にしないで議論すべきものではない。心理学の初学者中には、屢々心の正体や、死後の霊のゆくへなどを早く知りたがるものがあるが、それは見当違である。科学的心理学 (scientific psychology, Wissenschaftliche Psychologie) を学ぼうとする以上、そんな形而上学的資源は後回しにして、先づ吾々の実際に経験する精神現象の研究に進む可きである」と、その立場を明らかにしている。こうした態度には、実際に経験する出来事ではない霊などに対する関心を必ずしも失っていない他、研究対象とする可能性を決して完全に否定しているわけではないものの、実際に体験し得る現象を対象にしようとする立場を明らかにする意図があると考えられる。

この時代における心理学概論のテキストにおいては、科学的な視点は持たれているものの、「霊」や「仏教の第六識」(元良, 1915)のような形而上学的な内容について心理学の研究対象から必ずしも完全に排除されているわけではなかったと言えよう。また、紀平(出版年不明1901?)や元良(1915)においてはカントの哲学など、哲学的な視点が重要な理論的背景となっていた一方で、大槻(1912)のように哲学との区別を強調する立場や、増田(1934)のように思弁的な心理学を完全に否定するわけではないものの科学的な手法によって研究された対象を扱う態度などが併存していたと考えられる。

戦後～1960年代

戦後の日本の心理学の特徴に影響を与えたものとして、サトウ(2003a)が挙げるのが、高等教育や教師養成教育のあり方の変化である。つまり、第二次世界大戦に敗れて教育改革がある中で、師範学校で行われていた教師の養成が大学で行われるようになり、その中で教育心理学が教えられるようになったことが大きな変化をもたらしたとされる(サトウ, 2003a)。

そうした状況の中で、黒田(1947)は、「固より東洋に於ては、西洋に於けるが如き学的組織の形に纏められた心理学なるものは存在しないと云つて差支えない。併し、心の見方については、西洋心理学に見ることの出来ない特色ある研究を遂げて居る。中にも異彩を放つてゐるのは佛教心理学である」と、仏教における心理学が東洋における特徴的な側面を持っていることを認目ながら、「現代心理学の全般を論ずべき使命を有する心理学概論は、第一に努めて公平なる立場に於て、一方の学派の主張に偏することを避け、第二に出来るだけ精神現象の各方面について成されたる研究の結果を正しく理解することを目的としなければならぬ」(黒田, 1947)という使命を自らに任じている。そして「現代の一般心理学の傾向としては、経験的な、そして出来る限り実験的な方法に依つて、体験の注意深い分析と、その依つて来る根拠の説明とを以てその任務とする」(黒田, 1947)と、その役割を明確にしている。また、「ランゲはその著『唯物論史』に於て科学的心理学は『靈魂抜ききの心理学』たるべきものであることを説いたのであるが、心理学の近代の傾向からすれば正に此の要求を八九分通り充たして居ると云ふことが出来る。すなわち靈魂の問題は形而上学に委ね、独立の科学としての心理学は、経験の上に現はれる心即ち心的なもの靈的なものを記述し説明するものであるとする意味に於て、此の事が確かに承認されるのである」(黒田, 1947)と述べ、心理学として取り扱うのが靈魂などの形而上学的な、意識的に経験することが困難なものではなく、経験的

なものに限られるという立場を明瞭にしている。

また、大脇(1948)は心理学の定義について、「現代の心理学は決して固定的な実態としての『心』 Seele の学ではなくて『心のはたらき』の学である。『心』といふ不変不動の存在や、或は死者の『靈魂』や或は身体から遊離した『心靈』とか『精霊』などは心理学では研究しない。心理学者の研究するのは生きた人間、その他の生物の心のはたらき、即ち心的活動である。ところがもう一步進んで心理学の研究対象を明らかにするには、対象を直接の研究対象と究極の研究対象とに区別して別々に取り扱わねばならぬ」と言う。そして、「先づ第一に心理学の直接の研究対象は今いつたやうに明瞭に意識された心的活動である」、「心理学の研究する代表的な心的活動を挙げると、感覚、知覚、注意、記憶(銘記、想起、再認)、想像、思惟、判断、感情、気分、情緒、表情、欲求、意志、願望、行動、作業、夢などである」(大脇、1948)と、当時において心理学の研究対象とされた心的な働きについて列挙している。つまり、ここでは哲学的な観点から心の働きについて考えようという態度ではなく、観測可能な対象についての研究の積み重ねが重要視されていると言えるだろう。一方で、大脇(1948)は心理学における究極の研究対象について、「次に心理学の窮極的な研究対象とは何であるか。前述の意識的な心的活動は吾々の精神生活の中の個々の一時的な断片である。それは毎夜の睡眠に大きく中断されてゐるのみならず昼間の覚醒時においても決して一様に連続してはゐない。吾々人間の体験は決してかかる個々の意識的な心的活動の寄り集りではない。吾々は身体と同様に持続的な、かつ全体的、統一的な心的構造とも呼ぶべきものを持つてゐるのである」と、個々の経験可能な研究対象となる心の働きだけではない、心の全体像や統一的な構造こそが究極的な研究対象となることを説明している。さらに、「心理学の直接の研究対象は行動を含めての意識的な心的活動であるが、しかしその究極の対象は、心的活動を通じて個性的な心的構造を究めるにあるといふことができるであらう。ここにいふ心的構造は従来の心理学において『心』、『自我』、『精神』、『人

格』などと呼ばれる概念とある程度近似した内容を持つてゐる。しかしこれらの語は或は価値論的或は哲学的な古い幾多の臭味を伴つて居り、その上、あまりに単一不可分析的な意味が強く、現代の科学的研究の目標を指す概念として適當であるとは認め難い。かかる理由から著者はこれらを避けディルタイ Dilthey, W. 乃至はクリューガー Krueger, F. の用例に従つて心理構造の概念を採る者である」(大脇, 1948)と、それまでの哲学的な立場から区別しながらも、自らの立場としてディルタイやクリューガーなどの解釈学的な立場を明らかにしている。つまり、大脇(1948)は、直接的に研究対象とされるものは意識的な心の働きである一方で、その研究の窮極的な目標として、統一的な心理構造を明らかにすることとしており、窮極的な心理構造にもまた一定の関心を留保していたと考えられる。

ただし、大脇(1948)においては、「心理学は直接には有機体の意識的な心的活動乃至は行動を研究し、窮極的にはそれを通して個体の心的構造を確かめんとする科学である。かかる意味でそれは人間についての科学の一つである」と、科学的な態度を強調している。さらに、「そしてそれは生きた人間だけを取り扱ふ点で人類学や解剖学から区別され、生理学乃至生物学と姉妹関係を持つ。他方においては一般に社会科学または文化科学と呼ばれる諸科学に対しては基礎的な役割を果すべき位置に立つている。今日においては心理学は未だ極めて不満足な状態にある科学であるが、自然科学と文化科学とは心理学においてこそ連結せられ心理学によつてこそ媒介されるべきであろう」、「ここで心理学が科学であるといふのはそれが実証的かつ経験的な学であるという意味なのである」(大脇, 1948)と、心理学が経験科学であることを述べると同時に、他の分野とどのような点で関連しており、どのような点で異なっているのかについて述べており、心理学が取り扱うべき対象について明らかにしようとしている。つまり、究極的な目標としての統一的な心理構造を明らかにすることは目指しながらも、それを哲学的、思弁的に進めるのではなく、科学主義的、実証的な研究によって進めるという立場を明確にしていると考えられる。

同様に、岡(1948)は、「人類が自己の精神生活の研究に、興味を起こしてより以来、其興味は二つの形をとつて居る。其は哲学的の者と科学的の者との二つである。哲学的興味は、元は人の宗教的要求、即ち、不死の希望や肉体滅後も靈魂生活が残ると云ふ信仰などから起こりし者で、此が次第に發達して、所謂靈魂心理学と云ふ形式をとる。科学的興味は、人の知的性質から起こりし者で、此が次第に發達して、所謂經驗心理学と云ふ形式をとる」と大きく心理学を二つに区分している。そして、「經驗心理学は靈魂心理学よりも新しく、且つ今日に於ては經驗心理学の実が盛んである。けれども經驗心理学は其本質上、一面的であつて、精神生活の現象のみしか取扱はないのであるから、靈魂心理学、即ち精神生活の形而上学の問題や研究は、最早や少しも重要でないと思ふべきではない」(岡, 1948)と言う。つまり、岡(1948)もまた、増田(1934)と同様に科学的な經驗主義をその基礎としているが、必ずしも形而上学的な問題に目を瞑るわけではないという。しかし、「しかし今は靈魂心理学の学派の分類、関係、比較、批判などを、あまり多く述べてゐられない。それは哲学者の仕事であつて、心理学者の仕事ではない」、「今日では普通に、心理学と云ふ詞は經驗的、即ち科学的心理学を意味し、靈魂心理学と云ふ詞は顧られてゐない」(岡, 1948)として、自らの拠って立つ立場が經驗心理学であることを示している。つまり、靈魂などの形而上学的な問題を窮極的な対象とすることは否定して、科学的に検証が可能な体験を重視する態度をより明瞭にしていると言えるだろう。そして、經驗心理学の立場について、「現代の科学的心理学」を「科学的心理学の問題とする處は、たゞ、精神生活における事実、現象を發見し、其等の事実、現象を注意深く叙述し、分析し、分類し、且つ出来るならばそれらの事実、現象間の関係の法則を、決定せんとする丈けである」(岡, 1948)と、心理学において取る立場を經驗主義的な立場とすべきとして、形而上学的な靈魂心理学は心理学の研究の対象としないということを強調する。ここで見られる態度は、經驗主義的、科学的な態度をその思想的な立場として強調するものであると表現出来るだろう。

本宮(1948)は「心理学を定義するに現今の心理学者は主として二つの立場より出発する」と述べ、ヴントなどの言う意識を対象とするものと、行動を研究する科学とに分けそのどちらだけでも心理学全体を代表するものではないとしている。そして、「意識の心理学は従来意識内容を研究するものとせられたが、意識過程を説明する法則をも研究するものであり、また意識の機能を研究するものである」、「夫れ故に心理学を定義して心理学は経験作用及び行動の学なりと云うたならば適當であると思うふ」と述べる他、研究態度についても「構成心理学」、「機能心理学」、「行動主義心理学」、「形態心理学」などの態度を挙げ、「以上四つの心理学研究の態度は何れも必要なもので、精神生活の全体を理解するためには是等総ての態度を適当に採用せねばならない」(本宮, 1948)と、科学的な態度を持っていることは前提としながらも、その中で様々な立場があることを併記して、そのどれかに立脚するのではなく、それらを適切に採用することを主張する。

一方で、安倍(1949)においては、心理学の研究対象についての歴史的変遷を、「(一)吾々の意識に身近かに経験することのできない所謂『靈魂』と云ふ心を心理学の対象とすべきであるとした時代もあった。(二)反之、吾々の意識に於て身近かに経験することのできる『意識経験』こそ心理学の対象とすべきであるとした時代もあった。(三)さらに最近に於ては人の『行動』を研究対象として、其処から行動を支配してゐる原理又は法則を発見するのが心理学の任務だとする見解が可成支配的である」としながら、「『意識』と云ふものがすでに流れてある経験に気付くことであるとせば、其意識の母体たる其全体的体験の流れと云ふものは一体どんなものであらうか。私は意識の母体たる全体的な体験の流れを『根源体験』と名付けてゐる」(安倍, 1949)と、意識的に感じられる心の根源になるような無意識的な体験について述べている。そして、それを「これ等意識の母体である根源体験は、自分で自分を見る自我が其体験の流れに没したもので、そこには主観と客観とは全く対立してゐないのである。フッセル E. Husserl は

か様な体験の特性を『絶対主観性』と名付けてゐる。此言葉を借りて云ふと、根源体験は即ち主観客観対立以前の絶対主観性の状態にあるものと云ふことが出来るのである」(安倍, 1949)と、フッサールの考えを引きながら現象学的な理解を提出している。つまり、経験的な科学としてのみではなく、その根源にあるような体験を前提として、それを基にして心理学を描き出そうとしていると考えられる。

そして、安倍(1949)は「『心』は、心身分離以前の統一的全体であるところの『人』の内面的表現であった、根源体験を其原始形態とし、『人』の活動(広義の行動)が開始されるに従つて意識化し、而かも其背景には必ず無意識的经验を伴ひ、これを通じて根源体験と連なつてゐる」と、心について定義的に述べた上で、「『心』のほんたうの姿を把へるには『心』と云ふ同位の水準から見ではわからない。『心』の現象を部分として含む人の活動といふような高次の立場から之を眺めて見なければならぬ。か様な研究の立場をとるのがゲシュタルト心理学の立場である」、「『環境-内-行動』を全体的に観察して、その行動の生きた原理法則を明らかにし、其明らかにされたところのものに照らして生きた意識体験の構造や其中に支配してゐる原理を発見してこそ初めて『心』のほんたうの姿がわかるのである。こゝにゲシュタルト心理学の狙ひがある」と、自身の拠つて立つゲシュタルト心理学の立場を明らかにしている。ゲシュタルト心理学に関連して、木田(1991)が、「『刺激』とか『感覚』、『反射』といった概念は、われわれの知覚経験や具体的行動の記述に即してつくられたものではなく、すでに物理的に解釈された客観的世界の方から出発して、こうあるべきだと推論されたものに過ぎなかつたのである。この点を鋭く批判したのが現代心理学の源流の一つとなつたゲシュタルト心理学 Gestalt Psychologie であつた」と言うように、ゲシュタルト心理学の見出した知見は、それまでの素朴な客観的世界に対する認識を変えることに寄与したと考えられる。そして、内的分節をもつて一つの意味を持ったまとまりこそが心理現象として我々に立ち現れてゐると捉えるゲシュタルト心理学の観点は、フッ

サールに始まる現象学と歩調を揃えながら、それまでの完全に普遍的な客観的世界を理性の力によって何の偏見もなく捉えることが出来る、という素朴な視点を捉え直す働きに繋がったという(木田, 1991)。つまり、安倍(1949)はそうした思想的な流れを背景として、現象学と歩調をそろえたゲシュタルト心理学の立場をとることを明瞭にしていると考えられる。

一方で、後藤(1953)は、「いかに深遠な思想を抱いていようと熱烈な情熱を感じていようと、それが行動に現れぬ限り観察されることが出来ないから、学問の対象とはならない」と述べ、内的な働きそのものは研究対象にはならないという。そして、「如何なる精神現象も、物質的経過の中でのみとらえ得る。これを逆に云えば、人間の精神とは脳髄内の変化であり、それは外界の変化が脳髄内に起こした変化の反映なのである。そこで物質現象に法則のあるように、その反映たる精神にも法則があり、その法則性を知ることが心理学なのである」(後藤, 1953)と、生理学的な指標を基にしたものであるべきであることを主張している。ただ、実際には実際の環境の中では物理学のように特定の現象のみを取り出すことが難しいことから、「心理学研究の材料は、人間が行動した成果一切を含むもので、様々なテスト・日記・作品・政治・歴史・経済動向等一切、人間の関係するものが材料となるのである。そしてどの様な条件が、どの様な行動を結果するかが分析されるのである」(後藤, 1953)と、心理学の対象が様々な行動に広がっていることを述べている。ここでは、心理学を経験主義的に捉えようという態度がある一方で、様々な現象を心理学の観点から捉えようという視点があることがうかがえる。

この時代になると、ヴェントの構成主義だけではなく、ワトソンの行動主義やゲシュタルト心理学などの学説が現れ、それらの中でそれまでの形而上学的、思弁的なものから完全に独立し、新しい経験主義的な科学であるという立場が強くなってきていると考えられる。そして、ここまで見てきたように、それらの観察可能な側面とは異なった究極の研究対象や思想的な背景に対しては一定の関心を留保しながらも、経験的、科学的な観点を

明確に主張することが重要になってきていると考えられる。

1960年代～1970年代

1960年代になると、それまでの構成主義や行動主義、ゲシュタルト心理学に加えて、1956年の「The Magical Number Seven, Plus or Minus Two」(Miller, 1956)に代表される認知革命と言われる動きの中で、単純な行動主義とは異なった認知的な側面を重視した認知科学的な手法がとられるようになってくる。

そんな中、永丘(岡本・永丘, 1960)では心理学について、「心理学の各学派がそれぞれ異なった発想法で出発し、心理学という名の下になされつつある諸研究が、必ずしも統一的な人間観、学問観を背景としているものではないことに、多くの人がすぐ気がつくであろう」と、同じ心理学という名で括られている研究であっても、その背景として様々な人間観や学問観を持っていることが指摘されるようになる。そして、「(心理学の研究対象が)現在では人間精神の全体を対象とすべきものと考えられている。つまりその点ではヴェント的思想と異ならない。ただ心理学は驚くほど敏感に時代時代の人間観と密接に結び付けながら自己の在り方を考えてきた習癖を持っている」と述べた上で、「哲学から一時は絶縁したように見えた心理学であるが、今は再び心理学にとって哲学が必要となってきた。これは単なる哲学への復帰であるとか、回顧的な接触ではなく、心理学の基礎に人間哲学がしっかりと根をすえなければならなくなったということである」(永丘, 1960)と、心理学を考える上で哲学的な背景について意識的であることが必要になってきていると言う。それは「実存主義の人間観」が心理学に影響してきていること、そして「近代心理学が主知主義と感覚主義との抱き合わせにおいて誕生し、やがてその両極への分極作用が種々の学派を生み出したように、今の現代心理学は実存主義と集団主義の結婚をまさにこれからはじめようとしている段階といえよう」(永丘, 1960)と述べ、

人間観などの哲学的な背景をきちんと理解することの重要性を述べている。そこには、様々な人間観を背景とした研究の中で、いかに心理学として意識的であるかについての問題意識があったことが示されていると考えられる。

一方で、同じ岡本・永丘(1960)の中では、「マイクロコスムとマクロコスム」(早坂, 1960)と、元良(1915)が扱ったものと同様のテーマについても取り扱われている。しかし、そこで述べられていることは「家族、あそびなかま、学校、職場などに展開される小集団はそれぞれ一つの小宇宙(マイクロコスム)であって、その成員である個人々々はたえずその動きに歩調を合せて生きている。しかしながらこうした小集団は決して、それ自体が自らの最終的原理によって動いてゆくのではない。小宇宙としての集団はさらに、大宇宙(マクロコスム)としての社会そのものの動きによって規定されている」(早坂, 1960)と述べているように、元良(1915)が扱った内容からは大きく異なっている。元良(1915)がカントの認識論を基礎にした内的世界をマイクロコスモスとして描いているのに対して、早坂(1960)が扱うのは、社会心理学において取り扱われるような、我々の属している大きな社会全体をマクロコスムとして、それに対する小集団である家族などのことをマイクロコスムとして説明するのである。つまり、元良(1915)と同様の言葉で表現される内容を検討していても、その内容については哲学的な認識論の議論ではなく、現実的な社会科学的な視点で考察されているということが出来るだろう。つまり、そこには哲学的な視点からの考察から、社会科学的な考察へと視点の在り方の大きな変化があるということが出来る。

また、相良(1968)では、心理学の成立から各学派の概要、さらに理論的な背景などを詳細に検討して、それらがいかに心理学に影響を与えてきたのかについて述べている。そして、「心理学はいろいろの立場を経て今日にいたり、そしてそれぞれの立場は必ずしも跡を絶ったわけではなく、今日にもその流れは伝わっているのであるから、もしそれぞれの立場の心理学者に心理学の定義をもとめるとすれば、返答はいろいろになる筈であ

る」と述べる。つまり、心理学者によって主義や学派、思想的背景が異なっており、それらが併存している状態であることを説明している。しかし同時に「今日の心理学の動向を総覧してみれば、大勢は“行動の心理学”とみる方向に傾いていることが観取される」（相良, 1968）と述べ、さらに「今日の心理学の大勢は行動科学的心理学の方向に傾いているといえる。しかしそれらは理論からみて行動主義心理学にかざられているのではない。今日の心理学は“行動からの心理学”というような表現をもってその特徴を示すことができよう」（相良, 1968）と説明している。ここで言う「行動からの心理学」とは、“行動”を広義なものとして扱うことによって、内観の報告などもそこに含むことになり、方法論的に「科学的に割りだされ、理論上構成された心」（相良, 1968）を扱おうという態度のことであり、そのように広義に行動を扱うことによって、様々な心理学が可能になったという。ここにおける相良(1968)の指摘は、理論的に行動科学的な心理学に限定されてしまっているのではなく、対象を操作的に定義するという手法によって立場を超えた心理学が可能になったことを示している点において、非常に重要なものであったと言えるだろう。

そうした心理学の情勢を踏まえて、鼻地(1978)は、心理学について「現代の心理学は、行動の科学というようになってきてからは、人間および動物のあらゆる行動の領域を研究の対象とし、それぞれの対象に合致した方法論を用いることによって研究してきたので、研究領域も非常に分化してきている。この傾向はアメリカのプラグマティズムの影響をも受け、膨大な心理学の領域を生み出してきているのである」と述べている他、江川(1978)は、「ヴントの構成心理学」、「ワトソンの行動主義」、「ゲシュタルト心理学」、「フロイトの精神分析学」、「新行動主義」と、心理学の発展を概観した上で、新行動主義が物理学において提唱された操作主義を導入することで心理学の科学性を支えたことにより「新行動主義は、方法論の上で今日の科学的心理学の直接的基礎の出発点となった」と述べている。そして、「1930年代以後、今日までの心理学は、人間および動物(生活体ない

しは有機体とよぶ)の行動と意識を対象としてきているといえる。むしろ無意識も広義の意識とみなせるので、心理学の対象に加えられる。今日の心理学は全体としては、一時代以前のように対象を意識や、狭義の行動(微視的行動と巨視的行動)、あるいは無意識のいずれか1つのみに限定しないのである。結局、現代心理学は、意識も含めた〈広義の行動〉を研究対象としている。今日、心理学を『行動の科学』と呼ぶ場合、当然、その〈行動〉は意識をも含めた〈広義の行動〉のことである。そして現代心理学の課題は、広義の行動の法則性の発見と、行動の予測ならびに制御にある、とされている」(江川, 1978)と、心理学が広義の行動を対象にした科学であるように変遷してきていることを明らかにしている。一方で、江川(1978)は、心理学と呼ばれる領域において多数の学説や法則、原理が提唱されており、その中には科学的基準に見たいないという理由で過去のものになったり、科学的でないという批判を受けつつも有用性のために残っているものなどがあることを指摘した上で、「各下位領域が比較的独立に研究が進められてきたため、術語、法則、理論において、それぞれの内部で相互間に実質的重複が結構見られる。さらに、同一領域内での同一現象・事象に関して、5個をこす多数の理論が存在することも決してまれではない」(江川, 1978)と、心理学において多様な学説や理論が並行して存在している現状の複雑さを説明している。そして、「だが科学理論として、このままでは是認されるわけにもいかない。ほかの科学でもそうであるが、理論の統合・整理は科学研究の大事な課題である」(江川, 1978)として、心理学の科学的な理論を整理・統合していくことの必要性を述べている。こうした捉え方は、相良(1968)の言うように、広義の行動を研究対象にすることによってさまざまな心理学が可能になってきている一方で、それが理論的に必ずしも統合されているわけではないことを示しているということが出来るだろう。

ここまで見てきたように、この時期は、認知革命によって新たな視点もたらされ、相良(1968)が「行動からの心理学」と表現したように、統一

的な思想的な背景や人間観から捉えられるものではなく、行動を広義に捉え、そこから導き出されるものを幅広く心理学として、教えられるようになっていった時期であると考えられる。

1980年代～

サトウ(2003a)は1972年に日本で開催された第20回国際心理学会議などを一つのきっかけとして、「国際心理学会議を成功させた日本の心理学『界』は量的にも質的にも拡大していきました」と述べ、日本心理学会の会員数が著しく増えるなど、日本において心理学が拡大してきたと述べている。実際に、1980年ごろから大学などでも心理学が専門科目として教えられることが増え、心理学概論のテキストの出版も増えている。

大村(1980)は、それまでの心理学の変遷を踏まえながら心理学について、心理学の泉源ともいべきアリストテレスの時代においては非科学的、思弁的なものであったが、そこから時代を経て「その後の科学の発達によって漸次『人間性の科学』としての心理学に変貌していった」と言う。そして、精神分析学の知見なども吸収したうえで、「心理学は広い意味での行動を対象にしている『行動の科学』だといっても誤りではない」と述べている。そして、心理学の発展を図(p.18)のように示した上で、「第2次世界大戦勃発以降、心理学に『主義』とか『学派』とかいうものがなくなったといわれている。ドイツが主役であった時代が去って、心理学界の新しいリーダーとしてアメリカが登場してきたからである。アメリカという人種の^{るつぽ}垣塙はまた学問の^{るつぽ}垣塙であったといえよう。現在、自分を精神分析学者であるという人はいるが、行動主義者であるとか、ゲシュタルト心理学者であるとかいう人はほとんど見当たらない」(大村ら、1980)と述べている。つまり、1960～70年代の認知革命などを経て、アメリカを新たなリーダーとしながら行動を対象とした研究が中心になった時代背景もあり、主義や学派などに分けて、その立場を明らかにしようというのではなく、様々な

主義や学派を坩堝のように飲み込み、科学的な研究手法を用いるものとして心理学が考えられるようになっていくといえる。また、金城(1984)では、ギリシア時代から、プラトン、デカルトといった哲学の中で扱われた心理学の変遷をたどったうえで、哲学から分離した心理学がいかに発展したかをヘルバルト、フェヒナー、ヘルムホルツ、ヴント、エビングハウスなどの研究を丁寧に検討しながら説明する。そして、「現代の心理学では、心理活動に関する実証的・理論的・実験的研究、というコンセンサスのもとに研究が進められ、その成果が集積されつつあるが、どの側面にたいしてどんな方法で接近し取り組むかという点ではかなりのバラエティがあり、それぞれの分野が形成されている」と、ゲシュタルト学派、行動主義、精神分析学などが並列して説明されている。

同様に、原岡(1986)になると、日常的に経験する心理と行動の変化を例に挙げたうえで「状況が共通してくると人々の行動が類似してくるなら、人々の感じ、考え、欲求、態度なども共通したものになるに違いない。それによって共通な行動が引き起こされているかもしれない。科学的研究法を用いれば人間行動の法則性がわかりそうである。心理学は、このように人間行動の法則性を科学的方法によって見出そうとする学問である」と述べた上で、心理学の歴史について言及する。そして、ヴントの内観心理学、ヴェルトハイマーのゲシュタルト心理学、ワトソンの行動主義、ハルヤートルマンの新行動主義、フロイトの精神分析学などを概説して、「この他、いろいろな心理学研究が開発されたが、現代心理学に大きな影響を与えているのは、ゲシュタルト心理学、行動主義心理学、精神分析であろう。このようにして、現在、心理学は精神生活あるいは行動の法則を明らかにし、その知識に基づいて生活の向上をはかろうとする科学であるといわれている」(原岡、1986)と、3つの主要な潮流を紹介したうえで、心理学を精神生活や行動の法則を明らかにする科学であるという。ただ、ここでもゲシュタルト心理学や行動主義、精神分析学などが並列して並べられており、それぞれの背景にある哲学的、あるいは人間観の違いなどについて詳

細に検討されているわけではなく、また自らの拠って立つ立場について明瞭にされているわけではない。それは、概論としてあらゆる立場があることを客観的に示そうという態度であると考えられるだろう。そうしたあり方に関連して、松田(1997)は「20世紀前半のしばらくは、何をどのように研究することが心と行動についての科学的に正当な知識をもたらす方途であるかについての議論、つまりは心理学研究上の主義主張をめぐる学派の間の議論が盛んであった。これらの学派は、20世紀中頃までには対立の時代を終えて、今では是々非々の柔軟さで現代の心理学に影響を与え続けており、その意味で、いずれの学派も現代心理学の源流と評価されている」という。つまり、それぞれの思想的立場や人間観について列挙しながら、それらに重みづけをするのではなく、多様な源流を保ちながら全体としての心理学が成立していつていることを説明している。

そして、荻阪(2011)では、「心理学は、他の科学と同じく、長い期間哲学の中で育ち、哲学から分離独立して1つの科学分野となった」と述べ、「心理学は哲学と別れて何が変わったのだろうか。一般的に、学問分野を分ける要因には、研究テーマ、研究方法、それに実践性がある」と述べて、その3つによって心理学がいかに哲学から分かれたのかについて述べており、現代の心理学が哲学とは異なった、独立した科学分野であるということが強調されている。鈴木(2011)では、鹿取(2008)の定義を引用しながら、心理学を「心理学とは何か。『心理学は、生体が示す特定の行動が、どういう条件で発現し、また抑制されるかを、さまざまな実証的データから明らかにして、その分析から、そうした行動を支えている内的過程(こころ)のメカニズムを推論しようとするのである』という定義(鹿取, 2008)が、今のところ最も適切なものであろう」と述べている。つまり、行動に関する実証的なデータの分析から推論される内的過程によってとらえられるものだと考えている。その中では、現代の心理学における観点としてアトキンソンら(Atkinson et Al. 1996)の挙げる「生物学的観点」、「行動学的観点」、「認知的観点」、「精神分析的観点」、「現象学的観点」を列挙して、これら

の観点があることを述べているが、それらがどのような人間観などに基づいているかについての詳細な説明がされていないわけではない。そして、これらと同様の立場は、その他の「心理学概論」テキストにおいても多少の差異はみられるものの、共通している(吉崎, 2010; 小川, 2012; 宇津木, 2012; 巖島, 2014; 日比野, 2018; 松田, 2018; サトウ, 2018; 東山, 2019; 加藤, 2020; 山口, 2020; 大淵, 2021)。

一方で、心理学概論のテキストのうち、鈴木(2014)のようにその立場をより明瞭にしているものもある。そこでは、「人間が100人いれば、100個の心理感が存在しうる」と言うように、人によって人の心理に対する捉え方に違いがあることを認めつつ、「心理学が言えることは、ただ単に、いろいろな実験や調査の結果得られた再現性のある、客観的データや調査資料、統計処理に基づいた、多くの人に共通した傾向でしかありません」と、その客観性や再現性を強調して、「精神分析学も同じく、その大部分の理論は実証されたものではありません」「実験的な再現性、公共性がない、あるいは非常に低いという意味では、現代の心理学とは異質な存在です。ただ、心理学の発展に精神分析学は大きな貢献をしてきたことは否定できませんし、それを無視して、講義することも不可能です。心理学と精神分析学が同じものであると思っている人がいますが、精神分析学は心理学ではなく、その一関連分野であることを理解してください」と心理学の客観性が強調されている。しかし、向井(2016)が、「心に関する問題は、古くは宗教や哲学において取り上げられてきたが、自然科学の進展とともに、内省のような思弁的な方法ではなく、実験による客観的・科学的な方法で心を探る試みがなされ、(現代)心理学が誕生した。その後も心理学は発展を続け、一部には精神分析学の影響を受けつつも、観察可能性を重視した行動主義的な立場が席卷した。しかしその反動のように観察できない思考・判断過程を研究する認知心理学や、人間の主体性を重視する人間性心理学などが登場し、まさに、思想を異にする様々な理論が『心理学』という土俵に上がっているかのようなようである」と述べているように、様々な立場を

と専門分野や専門家が併存しているのが現在の状況だと言えるだろう。実際、1970年代ごろより心理学概論のテキストが個人名義ではなく、数多くの執筆者の分担執筆によって書かれることが多くなっている。本論執筆の際に入手できた文献の内、単著は1960年代までには、紀平(出版年不明1901)、元良(1915)、増田(1934)、本宮(1948)、岡(1948)、大脇(1948)、安倍(1949)、後藤(1953)、相良(1968)と一定の割合であるが、1970年代以降には小川(2010)が見られるのみであり、多くの心理学概論テキストは、各分野の専門家が分担して執筆をしており、必ずしも統一的な視点で書かれるわけではなくなっていると考えられる。

心理学を教える上での課題と心理学の今後

ここまでに見てきたように、心理学概論のテキストにおいて、当初は哲学的な観点や形而上学的な体験について関心が向けられていたのに対して、時代を経るにしたがって統一的な視点や人間観によるのではなく、様々な思想的背景を持った心理学がそれぞれの流れを保ちながら併存していると語られるようになっていったという傾向があるのではないかと考えられた。その背景にあるのが、相良(1968)が言うように、心理学が統一的な人間観や心理の理解から説明される行動の科学なのではなく、広義に捉えられた「行動からの心理学」と考えられるようになっていったことによると考えられる。

その中で、元良(1915)が取り上げたような形而上学的な体験などについては、科学的、実証的な裏付けが得にくいということもあり、そもそも心理学概論のテキストにおいては取り扱われなくなってきている。もちろんここで、元良(1915)などの取り上げたような実証研究が困難だと考えられる神秘主義的、あるいは形而上学的な体験について取り上げるべきであるなどと主張しようというのではない。しかし、ゲシュタルト心理学や認知革命は、心理学の一つの発見というだけではなく、思想史の流れの中で大

きな役割を果たしてきていると考えられる。また、臨床心理学の分野におけるロジャーズの理論やそれを継承・発展させたジェンドリンの思想においてはフッサールの現象学などとの関連が指摘されている(三村, 2009; 2011)。また、そう考えるならば、それぞれの理論などの背景にどのような人間観があるのかなどについて、意識的であるということは重要なのではないだろうか。それは、その理論や研究結果について正しく理解することを促進するだけではなく、現代を生きる我々がどのような人間観を持っているのかを明らかにすることに繋がる他、それを反省的に捉えることを可能にするためである。

上に見たように、心理学は様々な側面を持っており、その全般を一貫して教えるということには困難さが伴うと考えられる。特に、20世紀に入ってワトソンの行動主義、ゲシュタルト心理学、さらに1960年代以降の認知心理学や社会心理学の発展などによって対象とする領域が拡大し、それに伴って心理学はそれぞれの分野の背景となる人間観や思想など、大きく異なったものを含む学問となってきた。その中で、心理学は一つの間観や世界観によって統一的に理解することが困難になってきていると考えられる。そのためにここまで見てきたように、心理学の全体像を教える「心理学概論」テキストにおいても、一つの統一的な思想や人間観によって心理学のすべてを説明しようというのではなく、「行動からの科学」(相良, 1968)という言葉で説明されるように、科学的、客観的な方法論によって検討されるということを基本的には強調していると考えられた。しかし同時に、それは構成主義から行動主義、ゲシュタルト学派、新行動主義など様々な立場があり、背景にある人間観には違いがあるものの、それらを明瞭にしないという態度だとも表現出来る。そのために、ここまで見てきたように元良(1915)などでは心理学概論のテキストの中でも自身の人間観や背景にある哲学的な視点について比較的明瞭に言及されていたものが、あまり言及されなくなっているのではないかと考えられた。

一方で、精神分析学を除いたとしても、ゲシュタルト心理学や社会心理

学、発達心理学、認知心理学などの背景にある人間観には差がある可能性もあるだろう。そして、そうした人間観に対する批判的検討によって、新たなパラダイムが生まれる可能性について考えるならば、それぞれの専門性の中で、その対象に対する見方がどのような人間観や哲学に則っているのかについて意識することは重要ではないだろうか。渡辺(2002)は、心理学と哲学の関係について「日本における心理学界と哲学界の、いびつで不幸な関係」を述べている。それは、「心理学者の哲学アレルギーと、哲学者の心理学蔑視である。年輩の心理学者なら、心理学はせっかく哲学から独立して経験科学になったというのに、いまさらなぜ哲学か、と面喰くさげに言うところだろう。若い世代となると今度は、例外があることは承知の上であえて言わせてもらえれば、そもそも反応しようにも哲学的素養自体が失せかけている、というのが全般的傾向だろう」といった態度が心理学界にあるという一方で、哲学界においても「高邁なる哲学的人間学にくらべれば、重箱の隅をほじくるような煩瑣にして浮薄なる科学主義か(実験心理学のイメージ)、理論的根拠のはっきりしない職業技術(臨床心理学へのイメージ)、ということになるらしい」(渡辺, 2002)と、哲学界においても心理学への関心が乏しいことを述べている。

渡辺(2002)は、当時「最も権威のあった」東京大学出版の心理学の概論書である「心理学Ⅰ・Ⅱ」(小笠原, 1976)に、心理学においては1930年代を境に大きな展開があり、以前には「何々心理学」と名のついた様々な心理学説が生まれたのに対して、科学的方位が確立されてそうした新しい新学説が生まれる余地がないのではないかと述べられていることを引用したうえで、その予言の言うようにはなっていないという。つまり、1950年代から60年代にアメリカで起こった認知革命が1970年代になって日本に押し寄せたほか、「行動主義、精神分析に対する第3勢力」としてマズローの人間性心理学が起ち上がり、さらにトランスパーソナル心理学や、ポストモダンの影響を受けた社会構成主義の影響によって「ナラティブ」の語が臨床系、発達系の心理学に浸透している、さらにアフォーダンス論や進

化心理学など、様々な理論背景が生まれ、「心理学界は、小笠原の予想をはるかに超え、現代心理学の5つのアプローチ論さえも超えて、まさに百花繚乱(もしくは百鬼夜行?)の趣だ」と、心理学において新たに多様な学説が生まれてきていることを説明している。そして、そうした状況について「これら『新心理学説』の次々の登場が、何ら科学としての心理学の内在的發展の結果などではなく、この半世紀の欧米諸国における時代潮流・時代精神や人間観の変遷と、またそれに伴う科学哲学の展開と、密接に結びついていることこそ、まず認識されなければならない」(渡辺, 2002)と言う。実際、渡辺(2002)に述べられているように、心理学の各パラダイムには、哲学的な背景が存在しており、渡辺(2002)の言うように、そうした哲学的な背景について知ることは重要だと考えられる。それは、一つにはそれぞれのパラダイムについて正確に理解する上で、背景になる哲学的理解があることが必要であるためである。そして、もう一つが新たな研究をしていく上で、その研究対象や視点の背景にある人間観や哲学的な観点を知ることによって、新たな視点や、その発展について考えることが出来るためでもある。

本研究の限界と今後の課題

本稿においては『心理学概論』という名のテキストの中の変化を見ることで、心理学の背景にある人間観や思想の変化の一部について明らかにすることが出来たと考えられる。その中で明治から令和に至るまで100年以上の間に日本でいかにして心理学が教えられてきたのかについて概観し、その全体像や変容について検討した。

ただ、その際に当たることのできた文献は筆者が入手することが出来たものに限られており、必ずしもすべてを網羅的、数量的に検討できているわけではない。また、心理学の全体像を教えるためのテキストであっても、必ずしも『心理学概論』という名前がついているとは限らず、「心理学」

などのタイトルで同様の内容のテキストも多く存在している。本稿ではそれらについても触れることが出来ていない。そのため、検討の内容も不十分にとどまっている可能性も考えられる。そのため、今後の心理学教育をより良いものとしていくために、これまでの社会の中で心理学がどのように教えられてきたのか、その背景となっている人間観や思想はどのようなものであるのかなどについて、より多くの文献に当たることで検討していくことが必要となるだろう。また、多くの心理学の概念や理論が海外で生まれたものであることから、そうした諸外国において心理学テキストがどのように編纂されているのかについて比較・検討することもまた重要となると考えられる。

文 献

- 安倍三郎 (1949). 心理学概論. 福村書店.
- 江川孜成 (1978). 心理学とは何か. 江川孜成(編著)現代心理学概説. 福村出版.
- 後藤金十郎 (1953). 心理学概論. 雄渾社.
- 原岡一馬 (1986). 心理学とは何か 原岡一馬(編)心理学概論. ナカニシヤ出版.
- 早坂泰次郎 (1960). 現代生活における精神の条件〔Ⅱ〕 岡本重雄・永丘智郎(編)現代心理学概論. 朝倉書店.
- 東山薫 (2019). 心理学とは 古見文一・小山内秀和・樋口洋子・津田裕之(編)はじめての心理学概論—公認心理師への第一歩. ナカニシヤ出版.
- 日比野英子 (2018). 心理学の歴史と方法 日比野英子(監修), 永野光朗・坂本敏郎(編)心理学概論—こころの理解を社会へつなげる. ナカニシヤ出版.
- 巖島行雄 (2014). 心理学への誘い 巖島行雄・横田正夫(編)心理学概説. 啓明出版.
- 金城辰夫 (1984). 心理学の歴史と方法 金城辰夫・野口薫(編著)心理学概論. 有斐閣大学双書.
- 鹿取廣人 (2008). 心理学の視点. 鹿取廣人・杉本敏夫・鳥居修晃(編)心理学第3版. 東京大学出版会.
- 加藤弘通 (2020). 新しい心理学のはじまり 川端直人・大島剛・郷式徹(監修), 加藤弘通・川田学(編著)公認心理師の基本を学ぶテキスト②心理学概論—歴史・基礎・応用一. ミネルヴァ書房.
- 木田元 (1991). 現代の哲学. 講談社学術文庫.
- 紀平正美 (出版年不明1901?). 哲学館講義録第十号 心理学概論. 哲学館.

- 黒田亮 (1947). 心理学概論. 三省堂出版.
- 増田惟茂 (1934). 増訂改版 心理学概論. 小山書店.
- 松田隆夫 (1997). 人間理解への接近—心理学の課題と方法— 松田隆夫(編)心理学概説—心と行動の理解—. 培風館.
- 松田幸弘 (2018). 現代の心理学 松田幸弘(編著)心理学概論—ヒューマン・サイエンスへの招待. ナカニシヤ出版.
- Miller, G. A. (1956). The Magical Number Seven, Plus or Minus Two: Some Limits on our Capacity for Processing Information. *Psychological Review*, 63, 81-97.
- 三村尚彦 (2009). ジェンドリンとフッサール—進展 (carrying forward) の現象学. *ディルタイ研究*20. pp.63-79.
- 三村尚彦 (2011). そこにあって、そこにはないもの—ジェンドリンが提唱する新しい現象学—. *フッサール研究* 9. pp.15-27.
- 本宮彌兵衛 (1948). 心理学概論. 高島屋出版部.
- 元良勇次郎・中島安藏訳 (1898). ヴント氏心理学概論. 富山房. Wundt, W., (1896). *Grzmdriss der Psychologic*, Leipzig, Engelmann.
- 元良勇次郎 (1915). 心理学概論. 丁未出版社.
- 向井希宏 (2016). 心理学とは何か 向井希宏・水野邦夫(編)心理学概論. ナカニシヤ出版.
- 永丘智郎 (1960). 近代社会における精神の問題—心理学のプロフィール. 岡本重雄・永丘智郎(編)現代心理学概論. 朝倉書店.
- 小川芳男 (2012). 心理学概論. 北樹出版.
- 岡道固 (1948). 心理学概論. 増進社.
- 大淵憲一 (2021). 心理学の歴史 大淵憲一・行場次朗(著)ライブラリ心理学の杜 1 心理学概論. サイエンス社.
- 大村政男 (1980). 心理学とはなにか 大村政男・岡村浩志・清水敦彦・常盤満(著)心理学概論. 福村出版.
- 大槻快尊 (1912). 心理学概論. 早稲田大学出版部.
- 大脇義一 (1948). 心理学概論. 培風館.
- 荻阪直行 (2011). 心理学の歴史. 京都大学心理学連合(編)心理学概論. ナカニシヤ出版.
- 相良守次 (1968). 心理学概論. 岩波書店.
- サトウタツヤ (2018). 心理学の歴史と成り立ち 野島一彦・繁栞算男(編)公認心理師の基礎と実践 2 心理学概論. 遠見書房.
- サトウタツヤ (2002). 戦前期・戦時期体制と日本の心理学—優生学・軍事・教育との関わりを中心に—. 立命館人間科学研究第 4 号. pp.33-47.
- サトウタツヤ (2003b). 近代日本における心理学の受容と制度化. 立命館人間科学研究第 5 号. pp.247-258.

『心理学概論』における心理学の扱いの変遷に関する一考察

- サトウタツヤ (2003a). 日本の心理学史—受容・展開・制度化. サトウタツヤ・高砂美樹(著)流れを読む心理学史—世界と日本の心理学 [補訂版]. 有斐閣.
- 昇地三郎編 (1978). 心理学とは 昇地三郎(編)心理学概論. 峯書房.
- 鈴木直人 (2014). 心理学とは 岡市廣成・鈴木直人監修, 青山謙二郎・神山貴弥・武藤崇・畑敏道(編)心理学概論. ナカニシヤ出版.
- 鈴木由紀生 (2011). 心理学とは何か—その観点と接近法— 小野寺孝義・磯崎三喜年・小川俊樹(編)心理学概論—学と知のイノベーション. ナカニシヤ出版.
- 高砂美樹 (2003). 心理学史の現状と展望—再び, なぜ心理学史を学ぶのか, どのように心理学史を学ぶのか サトウタツヤ・高砂美樹(著)流れを読む心理学史—世界と日本の心理学 [補訂版]. 有斐閣.
- 宇津木成介 (2012). 心理学とは 宇津木成介・橋本由里(編著)心理学概論—基礎から臨床心理学まで. ふくろう出版.
- 山口裕幸 (2020). 心理学の歴史 山口裕幸・中村奈良江(編)ライブラリ心理学を学ぶ1 心理学概論. サイエンス社.
- 吉崎一人 (2010). 心理学とは何か 吉崎一人・松尾貴司・斎藤和志(編著)心理学概説—こころを科学する. ナカニシヤ出版.
- 渡辺恒夫 (2002). 心理学の哲学とは何か 渡辺恒夫・村田純一・高橋滯子(編)心理学の哲学. 北大路書房.

Consideration of Changes in the Handling of Psychology in *Shinrigaku Gairon*

HISHIDA, Kazuto

Abstract

This paper examines how the teaching of psychology has changed with the changing times, especially after it came to be studied in universities in Japan during the Meiji period. Within this examination, this paper reveals changes over time in the way psychology has been handled in *Shinrigaku Gairon* (Outline of Psychology), a textbook for teaching psychology to beginners.

Psychology, which was established as an independent discipline separate from and independent of philosophy, initially emphasized the importance of positive science aspects but did not entirely dismiss interest in speculative and philosophical content, such as the influence of Kantian philosophy. However, this paper examines the fact that a range of positions other than constructivism, such as behaviorism, gestalt psychology, and cognitive psychology, began to form within the field of psychology with the passage of time. It came to be regarded not for its view of humanity or the like, but as a scholarship that conducts demonstrative research on behavior in the broad sense, including thought, as expressed by the term “psychology from behavior.” While each of these positions may have different views of humanity behind them, it was thought that teaching an outline of psychology more commonly explains these through their common points, such as demonstrative methodologies, rather than mentioning their differences. This is considered to be because it enables psychology to be regarded as a single discipline that includes diverse areas, but conversely weakens the perspective that questions the view of humanity that lies behind it.

Psychology includes diverse areas, and although they all take the mind as their

subject, they appear to treat and regard it in different ways. It is thought that being conscious of the view of humanity and the philosophy behind psychology may be useful in handling these differences more consciously.